Ayuchi
あ ゆ ち

[No.102/2025.10]

「都市景観：ナゴヤIII東」中川運河ギャラリー（イラストレーター / クレメンス メッツラー）

公益財団法人 あいちFG教育文化財団

愛知が誇る毛織物「尾州」

BISHU

木曽川の水の恩恵を受け、古来より織物で繁栄してきた尾州地方。国内最大の毛織物産地であり、さらに世界三大毛織物産地の一つとして、「尾州 ー BISHUー」という名の毛織物を世界へと広げている。

江戸時代には尾張国産品に

ガッチャン、ガッチャン。今は耳を澄ましても聞こえないが、かつては機織り機の音が、まちのそこかしこから聞こえていた愛知県一宮市。一宮市を中心に津島市や稲沢市の愛知県尾張西部と、岐阜県羽島市などの岐阜県西濃のエリアを「尾州」と呼び、古くから織物の産地として栄えていた。そして国内最大の毛織物産地であり、世界的に知られているイギリスのハダースフィールドとイタリアのビエラと並ぶ世界三大毛織物産地に数えられている。

日本では古来、流通の概念がまだなく、全国各地で布を織って衣服を作り、自分たちが着るものを調達していた。その頃の衣服の素材は、日本で栽培が可能であった麻やシルクであった。綿の種子が日本へ伝来すると、江戸時代には綿の栽培が各地へ広がり、木綿の衣服が一般になっていく。

尾州エリアにおいても麦の収穫後に生綿を作り、秋になるとまち中が綿の白さに彩られた。江戸時代の後期には、桟留縞など尾州産の木綿織物が尾張国産品として東西市場に出回り、名を轟かせるようになっていた。

一宮商人のあだ名は「一宮カラス」

尾州産木綿の全国拡散に一役担っていたのは、商売上手!?であった一宮の商人たち。この商人たちは一宮から四方へ綿や糸の買い出しに出かけ、夕暮れ時に山のような荷物を持って買ってくる様子が、黄昏時にカラスの群れが森に帰る姿に似ていることから、「一宮カラス」というあだ名がついたそうです。

転機は濃尾地震!?

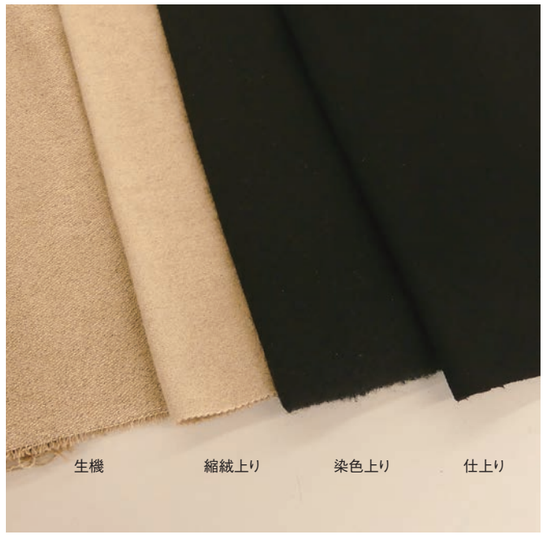
明治時代に入ると近代化が進み、官僚の制服や軍服などから洋装化が広がっていく。その流れに乗り、尾州の綿織物の生産量は明治一七（一八八四）年、大阪に次いで全国二位となり、尾州の織物産業は順調に発展。だが、この好調な状況を一変する出来事が、明治二四（一八九一）年に起きる。濃尾地震だ。多くの建物や民家が倒壊したこの巨大地震により、機織り機などの機具も損傷し、綿花の栽培も困難になる。復旧には新規事業と同じくらいの費用と労力が必要とされ、尾州の織物産業にとっても大打撃であった。さらに、安価なインド綿花の輸入が始まって、市場に安い綿布が出回るように。好評であった尾州産綿織物はどんどん衰微し、深刻な危機に直面する。

そこで注目したのが、羊毛。時代の流れをいち早く読んで取り組み始めていた毛織物の生産を本格的に始め、職人たちが試行錯誤して作り上げた毛織物は好評を得て躍進していく。鉄道の東海道線が開通すると全国流通するようになり、尾州の毛織物の認知度も高まっていった。世界三大毛織物産地への第一歩が踏み出されたのだ。

木曽川の恩恵

尾州で織物産業が栄えた大きな理由の一つに、近くに流れる木曽川の安定した流量がある。実は織物と水は、切っても切れない関係なのだ。というのも、原料である羊毛の洗浄、染色、仕上げと、作業の各段階で水を必ず用いるからだ。

さらに、木曽川の水が軟水であったことが功を奏す。例えば、最終の仕上げでミネラルの多い硬水で洗うと、ミネラルによって生地がゴワゴワした感じになる。だがミネラルの少ない軟水で洗うと、美しい発色で、肌触りのよい生地に。特に尾州の毛織物の特徴であるしなやかさは、木曽川の水によって生み出されているのだ。



まちが一つの工房であり工場

一枚の生地ができるまで、実に多くの職人たちの手が加わっている。しかも、糸作りから始まり、布を織って仕上げるまでの作業は、完全な分業・協業で行われるそう

だ。尾州の場合、そのすべての工程が地域内に集結し、一つのサプライチェーンで成り立っていることが、大きな強みとなっている。

各工程の職人たちは、技を極めていくために、日々研究を怠らない。毛織物を始めた頃は、海外の最先端の生地から糸のより方や織り方などを研究していたそうだ。ときには、「こんな糸を作ったけど、織れる？」「こんな布を作りたいけど、こんな糸は作れる？」みたいなやりとりが、職人同士であったかもしれない。これも、同じ地域内にあり、繋がりがあったからこそ、職人たちが切磋琢磨することができ、尾州ならではの特徴のあるさまざまな表情の生地が生み出されるのだ。

このサプライチェーンの体制は、尾州の特徴を守り、発展させていくためには欠かせない要と言えるだろう。

地球にやさしい毛織物

毛織物はもともと羊の毛で、埋めれば土に還ります。さらに尾州では、昔から端切れや古くなった毛織物の衣服をばらばらにし、もう一度糸にして生地を制作。もったいない精神から生まれた、地球にやさしい織物です。

尾州毛織物の作業工程

1 紡績

羊毛をきれいに洗い、紡いで１本のまっすぐな糸を作る

2 撚糸（ねんし）

複数の糸をより合わせて切れにくい強い糸、個性的な糸などを作る

回転速度や回転数を変えることで、さまざまな表情の糸が作られます

3 染色

糸の状態で染める「先染め」と、布の状態で染める「後染め」がある

4-1 製織

経糸と緯糸を交差させ、織って布地にする

●オーダースーツなどに用いられます

複雑で立体的な織り方は尾州ならでは！
3種類、4種類の素材を組み合わせて作られます

4-2 編み

糸でループを作り連結させ、編んで布地にする

●Tシャツやカットソー、靴下など幅広い製品に用いられます

5 染色整理

染色、表面の整え、起毛など織物や編物の生地の整え作業

滑らかな手触りや光沢を与えるために丁寧にお化粧する作業は、**「仕上げの尾州」**として名高いです

尾州マークで認知度アップ

世界の有名ブランドにも使われる尾州の毛織物。だが、実際に尾州産の生地で作られた製品かどうかを、一般の人々が知るすべはほとんどなかった。

そこで、尾州の生地の魅力を知ってもらい、尾州産であることがひと目でわかるように、「尾州マーク」を制作。平成二八（二〇一六）年より認証制度の運用が開始された。尾州マークは、次の二つの条件をクリアすれば、認証を受けられる。

一．織布、編立および整理加工の二工程が、尾州産地で行われた製品であること。

二．尾州産地で培われた技術的優位性や意匠性を活かして製造されたもので、モノづくりのストーリーを消費者に訴求することができる製品等であること。

国内はもちろん、世界の多くの人々の目に、この「尾州マーク」が留まるよう、尾州のチャレンジは続いていく。

尾州マークの初登場は、平成 24（2012）年の TOKYO GIRLS COLLECTION in NAGOYA でした

BISHU®

尾州産地の「尾」を、毛織物の毛をモチーフにしてデザイン。

魅力発信、交流拠点として

尾州ファッションデザインセンター

尾州の毛織物の魅力を発信し、毛織物産業の交流拠点でもある尾州ファッションデザインセンター。新商品の開発支援や国内・海外の販路開拓、人材育成、イベントなど尾州の認知度向上と発展のための活動を行っている。

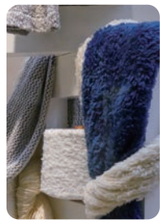
お話を伺った尾州ファッションデザインセンターの永山泰規さん（左）と大野拓さん（右）

匠と学生のコラボ「翔工房」

全国応募の中から選ばれた繊維・ファッションを学ぶ学生と、尾州の匠とのコラボレーションで進めていくものづくり。企画側の学生と生産側の匠とでは、同じデザイン画を見ていても捉え方が全く違うそうです。そこをすり合わせながら衣服の完成形を見据え、一枚の生地を作り上げていく作業は、織物の全工程を体験でき、学生にとっては貴重な経験と学びの場となっています。でき上がった生地で作られた衣装は、ファッションショーで一般公開もされます。

ジャパン・テキスタイル・コンテストの開催

次代のテキスタイル産業を担う人材の発掘、育成のためのコンテストも行っています。



11月に「BISHU FES.」開催

尾州の魅力を直に感じられるファッション・アートイベント！一宮駅周辺で開催予定です。

●詳しくは、一宮市観光協会まで

公益財団法人 尾州ファッションデザインセンター
愛知県一宮市大和町馬引字南正亀 4-1

■取材・撮影協力・写真提供／公益財団法人 尾州ファッションデザインセンター
■参考資料／公益財団法人 尾州ファッションデザインセンターのホームページ内・尾州織物産地の歴史と年表

社会における音楽の存在価値を高めていきたいです。

梶田美香

（名古屋芸術大学 学長補佐・芸術学部教授／あいちFG教育文化財団 理事）

■梶田美香 プロフィール

1968年名古屋市生まれ。フェリス女学院短期大学音楽科を卒業。ピアニストとして活動中に玉川大学教育学部に編入し、卒業後は名古屋市立大学の大学院に入学し人間文化研究科博士課程を修了。アウトリーチ活動、行政主催のイベントの企画・制作などを多数実施。今後取り組みたいことの一つに、母子生活支援施設への音楽芸術によるアウトリーチ活動がある。

仕事とは、求められなければ成立しないもの。音楽大学で学んでいた頃から思っていたことです。しかし芸術活動とは、求められて行うというよりは、自分たちの中にあるものを表出したいから行うものであり、私の中でなかなか整理のつかないものでした。

実際にピアニストとして活動を始めたとき、お客さまから「よかった」「とても素敵でした」と感想をいただくことがありました。とてもうれしいことであると同時に、”お客さま自身はどうであったのか“ということが気になっていました。”お客さまにとってどんな時間であったのか“ということが、私にとっては大切なことですから。もし、お客さまが演奏の良し悪しに重点をおかれて聴いているとしたら、楽しさはどこにあり、誰が楽しいんだろうという思いが募っていったんです。そこで、音楽ではない分野を学んでみようと思い、通信教育で玉川大学の教育学部に編入しました。

教育学部なので小学校の教育実習にも行きましたが、そのとき、小学校の先生方と私たち演奏家の考え方に違いがあることに気づきました。先生方が授業で重視されているのは、子どもたちが音楽の基礎となる知識や技術を身につけること。演奏家が大切にしているのは、みんなで音楽を感じ、感じたことをほかの人たちと共有すること。そのギャップを感じたとき、学校において授業とは違うアプローチで音楽の楽しさを届けられないかと思いました。そして、社会における音楽の意味を考えるようになりました。

卒業後は、さらに学びを深めるために名古屋市立大学大学院へ進み、学校教育と社会教育の連携という観点から、音楽に触れた後の気持ちの変化について研究を始めました。バブル期に全国で多く建設された公立劇場が行っている活動の中で、学校など地域のいろいろな施設に音楽を届けるアウトリーチ活動に関心を持ち、アウトリーチの研究を始めました。しかし当時、活動事例はたくさんありましたが、発表されていた博士論文は一本だけで、研究として成立しているものは少なかったので、大変でした。

大学院時代、研究で小学校四年生のクラスを対象に月に一回のペースでアウトリーチを行いました。子どもたちはいろいろな反応をしてくれたので、おもしろかったですよ。最初は、間近で生演奏を聴いて大きな音や指が速く動くことに驚くのですが、驚きの感情が落ち着いてくると、耳を傾けて音楽を聴き始めるんです。そうすると、実にいろいろな表情の感想がでてきます。中でも「今日の演奏はオレンジ色でした」という感想は、とても詩的で今も印象に残っていますね。また、日頃学校に来ないけれど、アウトリーチの日だけ登校する子がいたり、助け合いながら自主的に合奏の練習をする子たちもいて、先生方が驚かれている姿も印象的でした。授業とは違う側面で音楽に触れることで、子どもたちにとって何か感じ取るものがあり、いつもとは違う居場所をつくれたのかなと思うとうれしかったですね。

音楽には、想像することで、自分だけの夢の景色を創ることができる不思議な力があります。その力は、ときには一歩を踏み出したいけどなかなか踏みだせないときの後押しにもなると思うので、さまざまな人々に音楽を提供できる場をつくっていきたいですね。

現在は名古屋芸術大学で文化政策やアートマネジメントを教えていますが、学生たちが芸術大学に求める芸術の汎用性も、私の学生の頃とはずいぶん変わってきています。卒業後は学んだことを芸術とはまったく関係のない職種で活かしたいと考える学生もおり、芸術への携わり方の幅が広がっているのを実感しています。ただ、どのような道に進むにしても、芸術を多角的に見つめ、その先にいる相手を主語にして考えることで初めて、社会において芸術の存在価値を発揮できるのではないかと考えています。

学生たちはとても素晴らしい感性を持っていて、それを引き出すために、まず必要なのが私たち大人のアップデート！学生たちを理解するために、きちんと話を聴くようにしていますが、あまりにも世代が違い過ぎて、試行錯誤の毎日です（笑）。

願いは、アーティストが社会で求められる活動を見つけ、必要とされる人材になること。そのためにはアーティストが意識を変えていく必要もあり、思うようにいかないことばかりかもしれません。困難に直面したとき、私は「人事を尽くして天命を待つ」という言葉を胸に、「今はまだ途中の段階で、この先よい結果が待っている」と、常にポジティブに捉えるようにしています。挑戦は新たな自分の発見にもつながると信じて、こらからもさまざまなことに取り組んでいきたいと思います。―談―

People

“好き”と“楽しい”を原動力に!
舞台表現のおもしろさを伝えていく。

音楽劇・ミュージカルの企画・公演

芝居屋杜川リンタロウさん

第33回助成（個人）

幼稚園から小・中学校、小劇場からコンサートホール、道端、個人店舗などさまざまな場所で活動を展開。自身の舞台公演活動のほか、椙山女学園大学「ケースメソッドI」ミュージカル演出・指導、市民参加型企画ミュージカル「不思議の国のピーター・パン」の演出・出演・上演、尾張旭市文化会館自主文化事業の市民参加ミュージカル「リバーサンド・ストーリー」の作・演出・出演など、多数の舞台作品を手掛ける。年間に100ステージの舞台公演を目指し、精力的に活動している。

音楽劇
「おとなしいきょうりゅうとうるさいちょう」
10/12(日)にPICO2にて上演!

「皆さん、今日はご来場ありがとうございます〜〜♪」

開演前の歌を披露してくれた芝居屋杜川リンタロウさん。第一声を聴いた瞬間、からだ中に響きわたるような歌声にゾワゾワっと鳥肌が立った。

杜川さんは、愛知県を中心に全国各地で音楽劇やミュージカルの上演活動を行うプロの芝居屋だ。役者であり、脚本家や演出家、ときには音響や照明も行うなどさまざまな顔を持つ。

活動のメインとなっているのが、自ら出張公演と名付け、呼ばれればどこへでも行く『芝居屋杜川リンタロウ芸術鑑賞公演』。新しい舞台表現を目標に、愛知県のクラシック界で活躍する演奏家・作曲家とともにユニットを結成し行うこの公演は、基本は役者一人、演奏者一人からなる音楽劇だ。題材には、『一人で演じる走れメロス』『月光の二人』『仏典童話』などがある。公演会場の多くは、小・中学校をはじめ子供会や児童館など。観客一人ひとりの表情が見えるほど客席との距離は近く、子どもたちはいろいろな言葉をかけてくるという。

「予想もつかないお客さまとのやりとりはおもしろいですね」

観客をどんどん巻き込んでいく杜川さんの舞台では、観客も共演者であることを教えてくれた。

このほかにも、自身が運営するアートスペース「PICO2」での公演や市民ミュージカルでは、脚本家・演出家として活躍。出演者がアマチュアや市民であるこれらの公演で何よりも大切にしているのは、本人たちがやりたいと思うことを作品に活かすこと。そのため、応募者にはオーディションではなく、得意なことや一芸を披露してもらっているそうだ。また、物語りのテーマについても出演者に「何がやりたい?」と聞き、いろいろな答えの中からイメージを膨らませていくという。

「出演者が答えるテーマは、なかなか難しいものが多いです。『流れ星をやりたい!』と言われたときは、『どういうこと?』と頭をフル回転させましたね(笑)」

杜川さんが舞台を通して伝えたいことは、”舞台表現は楽しい!“ということ。

「雰囲気であったり、飛び散る汗であったり、振動であったり。ライブ感に基づくおもしろさを、初めて”舞台“に触れる人たちにも感じてもらいたいですね」

誰もが通い続けられる!
多様性を認め合える絵画教室を運営。

障がい者と健常者が共に活動を行えるアートクラブ

一般社団法人ワンダーハート

第35回助成（団体）

1995年に絵画教室「ポレポレの友だち」をスタート。2022年に一般社団法人ワンダーハートを設立。創作活動が行えるアートクラブ（絵画教室）の運営、展示会の開催をはじめ、自然とアートが出会う感動体験イベントの開催、作品と企業のコラボレーションなど活動の幅を広げている。地域の文化振興や障がいがある方の教育・文化活動の維持発展に貢献し、多様性を認め合うボーダレスで豊かな社会を目指している。

理事
春日井誠さん

代表理事
永山雅美さん

今年で三〇周年を迎える『ポレポレの友だち』は、ワンダーハートが運営する絵画教室だ。始まりは、春日井誠さんが養護学校で教えていた生徒に、卒業後も絵を描き続けてほしいという想いからであった。現在は障がいのある方や健常な子どもなど二七人のメンバーが、絵画などの創作活動を楽しんでいる。

「活動で大切にしていることは、誰もが自由に表現活動を楽しめ、通える環境をつくることです」

教室に通う人たちは、どんな場所でも創作活動ができるわけではない。ポレポレの友だちという場所だけが、創作の場となっている人が多いという永山雅美さん。しかも、障がいによっては掲示物を見ると剥がしたくなったり、花瓶があればひっくり返したくなる衝動が生じるため、そういったことを考慮して環境を整えなければいけない。また、大勢の人が苦手な人には、個人で創作できる教室を用意。創作する環境の重要性を教えてくれた。

描きたい!絵が好き!創作者自身の内側から湧きあがる衝動のまま描かれた作品は、どれもエネルギッシュだ。絵を描くのが大好きな子どもが、障がいのある方が描いた絵を見て「私もこんなふうに描きたい」という言葉がでるほど。また「絵を見た人が元気になっています」という言葉が寄せられるほど、人の心を動かすパワーを持っている作品たち。

「こんなにも素晴らしい作品を生み出せる力があることを、もっと皆さんに知ってもらいたいですね」

楽しそうに描く姿や描き終えたときの笑顔、でき上がった作品からものすごいパワーをもらっているという永山さんと春日井さん。作品を社会に伝えていくことで、障がいのある方たちへの差別や偏見が少しでも和らぐことを願っている。

ここで生まれた作品は、年に数回行われる展示会で楽しめる。また、企業とのコラボレーションでパッケージやステッキ、工事現場の現場シートなどにも用いられており、まちのふとしたところでも出会えるかもしれない。

教室名の「ポレポレ」は、スワヒリ語で「ゆっくり、のんびり」という意味。これからもマイペースに、笑顔になれる作品を届けていく。

想いや考えをキャンパスに。絵を通して広がるコミュニケーション。

美術部
名古屋市立北高等学校
第33回援助（高校生）

現在は23名の部員が所属。校内での作品制作のほか、自然やまちの中で絵を描く合宿なども実施。2018年より8年連続で全国高等学校総合文化祭に出場。このほかにもさまざまな美術展にも応募し、入賞している。北警察署からの依頼によるポスター制作や、地域のおまつりのポスター制作、サステナまち計画2024「まちかどフリースタイル」内の一つのイベントを企画・運営するなど、地域との連携した活動も活発に行っている。

八年連続で全国大会出場を果たす、名古屋市立北高校の美術部。初めての油絵の練習で名画を模写する一年生。自分の作品作りに没頭する二、三年生。環境をテーマに、立体作品に取り組む部員たち。そこには自己と向き合いながら、真剣な眼差しでキャンパスや作品を見つめる姿があった。

顧問の林田健先生は、部員たちが自分の理想とする作品作りに挑めるよう、基礎練習から始め、技術的な細かい部分の練習を段階的に積み上げていける練習メニューを組んでいる。その中には、筆さばきが学べる書道やモノを観る力を身につけていく右脳トレーニングといった、美術とは一見関係がないように思える練習方法も採り入れ、技術力の向上を図っている。

活動の特徴の一つに、地域の公共機関や企業と関わりながら行う校外活動がある。これまで市バスのペイントやポスターの制作、まちづくりプロジェクトの企画・運営などを手掛けてきた。

「絵を通してまちの人たちとお話できることがうれしいです。自分では気づいていないことを教えてもらえたりして、新しい面から作品を見られるのも勉強になります」

と、副部長の山本涼葉さん。

「地域の人と関わりが持てるなど、授業ではできない体験をすることで、世の中を見る目も養え、生徒たちの財産になっていると思います」

部員たちの成長を校長の鈴木彰芳先生は、頼もしく感じている。

校外活動のような大きな作品の制作は、全員で取り組む。皆で行う作品づくりでは、意見を一つにまとめる大変さはあるが、さまざまなアイデアを採り入れながら形にしていくのは、個人で行う作品づくりとはまた違う魅力があることを、部員たちは教えてくれた。チームとしてのコミュニケーションを重視する林田先生は言う。

「大切にしているのは、一年生から三年生まで分け隔てなく会話できる環境づくりです」

制作で息詰まると、お互いにアドバイスを求め語り合い、それが刺激にもなっているそうだ。

絵を描くことは、自分を表現すること。自分に足りないものを補うために、何をすればいいのか考える部員たちが、これからどんな作品を生み出していくのか、楽しみにしたい。

副部長
山本涼葉さん

顧問
林田健 先生

校長
鈴木彰芳 先生

仲間達の近況メモ

2025年 6月

●**合唱団 CORMI**　第34回助成・団体
合唱団 CORMI 第6回演奏会
〔電気文化会館ザ・コンサートホール（名古屋市中区）〕

●**古井戸芳生さん（現代美術）**　第12回助成・個人
古井戸芳生展 森の精「空気のデッサン」〔兜屋画廊（東京都）〕

●**ナゴヤディレクターズバンド**　第8回助成・団体
第55回定期演奏会
〔愛知県芸術劇場コンサートホール（名古屋市東区）〕

●**東海メールクワイアー（男声合唱）**　第7回助成・団体
第66回定期演奏会
〔刈谷市総合文化センター大ホール（刈谷市）〕

●第47回日本新工芸展出展〔松坂屋美術館（名古屋市中区）〕
森　克徳さん（陶芸）　第4回助成・個人「響象」
新野素子さん（染色）　第2回助成・個人「時の残ししもの－揺らぎ－」

●**加藤佳代子さん（室内楽）**　第20回助成・個人
フランス歌曲コンサート
〔電気文化会館ザ・コンサートホール（名古屋市中区）〕

●**西村一成さん（絵画制作）**　第20回助成・個人
西村一成展「東谷山を描く」
〔ハートフィールドギャラリー（名古屋市中区）〕

2025年 7月

●**福田律子さん（ピアノ）**　第33回助成・個人
ピアノ教室発表会〔西文化小劇場（名古屋市西区）〕

●**語人 サヤ佳さん（語り活動）**　第26回助成・個人
文月の語り〔西志津ふれあいセンター（千葉県）〕

●**浅井雅弘さん（写真を使う現代美術）**　第25回助成・個人
あたかも／時／事〔Empty Space（岐阜県）〕

●**堀龍太郎さん（彫刻）**　第11回助成・個人
第54回日彫展 東海展
〔愛知芸術文化センター（名古屋市東区）〕

●**大橋敏彦さん（金工）**　第3回助成・個人
第55回あかね会工芸展（主催：あかね工芸美術協会）
〔愛知芸術文化センター（名古屋市東区）〕

2025年 8月

●**総合劇集団俳優館**　第26回助成・団体
夏休みファミリー劇場2025（戦後80年企画）「あとかたの街～名古屋大空襲～」
〔アマノ芸術創造センター名古屋（名古屋市東区）〕

● **Marimbart（打楽器の演奏）**　第23回助成・団体
コラボックルコンサート&打楽器作りワークショップ
〔碧南市芸術文化ホール（碧南市）〕

●**古井戸芳生さん（現代美術）**　第12回助成・個人
中韓日アートコスモス 現代美術交流展2025
〔中国文化センター（千葉県）〕

●**平松八江子さん（ピアノコンサート自主企画）**　第6回助成・個人
第72回 ひらめのほのぼのコンサート「オカリナ・ピアノ 平和のハーモニー」〔熱田生涯学習センター（名古屋市熱田区）〕

●**新城吹奏楽団**　第6回助成・団体
サマーコンサート〔奥三河総合センター（北設楽郡設楽町）〕

2025年 9月

● **Marimbart（打楽器の演奏）**　第23回助成・団体
「打フェスタ with MARImbart Vol. XX」
〔東文化小劇場（名古屋市東区）〕

書籍・会報誌等の発行

●**春日井郷土史研究会**　第15回助成・団体
3月…「春日井郷土史」第9号発刊

●**江南郷土史研究会**　第3回助成・団体
6～9月…「江南郷土史研究会会報」556～559号発行

●**小牧市文芸協会**　第2回助成・団体
5～8月…郷土文芸誌「駒来」第640～643号発行

●**東海化石研究会**　第31回助成・団体
4月…東海化石研究会誌「化石の友」第70号発行

●**まつり同好会**　第25回助成・団体
5・8月…「まつり通信」637・638号発行

●**野田史料館**　第1回助成・団体
5月…「野田史料館報」第172号発行

●**愛知中世城郭研究会**　第30回助成・団体
8月…「愛城研報告」第28号発行

●**岡崎地方史研究会**　第34回助成・団体
8月…「岡崎地方史研究会便り」No.64発行

YouTube

●**菅谷瑞恵さん（教育・演劇）**　第33回助成・個人
「満蒙開拓を語り継ぐ」手記朗読プロジェクト
〔毎週月曜日22:00～ 配信〕

これからの公演

●**芝居屋杜川リンタロウさん（音楽劇・ミュージカルの上演活動）**
第33回助成・個人
10/12…「おとなしいきょうりゅうとうるさいちょう」
〔PICO2（名古屋市北区）〕

●**名古屋合唱団**　第15回助成・団体
10/13…「名古屋合唱団演奏会2025」
〔東海市芸術劇場大ホール（東海市）〕

●**クール・ジョワイエ（男声合唱団）**　第25回助成・団体
11/23…クール・ジョワイエ演奏会2025「男声合唱による萩京子の〈個展〉」〔ウィルあいち（名古屋市東区）〕

※ここには事務局に入った連絡分をまとめて掲載しました。連絡状況によって、掲載のタイミングがずれる場合があります。ご了承ください。今後も皆さんの活動状況をお知らせいただければ幸いです。

編・集・後・記

今回の特集で紹介した尾州の生地には、平らな生地や立体的な生地など、実にさまざまな種類があり驚きました。ものづくりにかける職人さんをはじめ、関わるさまざまな人の情熱が感じられる完成した生地は、どれも素晴らしかったです。

これから、どこかで尾州マークに出会えるかもしれないと思うと、タグなどのチェックも忘れずにしたいなと思いました。

表・紙・作・品

「都市景観：ナゴヤ III 東」
縦290×横210㎜
素材等：ガラスペン、墨と小原森下紙
中川運河ギャラリー
（イラストレーター／クレメンス・メッツラー）
（第34回助成）

●作者の言葉

名古屋に来て25年。退屈に見えた街並みの儚い魅力を愛するようになり、自分の絵を通して新たな故郷を見出してきた！そして、私の視点からこの街を皆さんと分かち合いたい。

第36回（2025年度）

助成および援助対象先決定（敬称略）

笑顔や元気をもたらしてくれる芸術文化。
今年度、新たに加わった“仲間”をご紹介します。

一般助成　個人

粕尾将一……なわとび競技（ジャンプロープ）の普及と指導
加藤恵利子……コンサートの企画、構成、演出、出演
川本麻里那……演劇活動への出演、制作における文化芸術活動の振興
田中　峻……ミュージカル制作を通じた地域貢献
平尾泰子……コンテンポラリーダンスのワークショップ・公演
須貝　旭……絵画の制作、発表「時間を可視化する絵画」
山崎有美……子どもや地域住民を対象とした日本画の体験・鑑賞
木村玲子……ガラス胎有線七宝の研究と制作

一般助成　団体

岡崎おやこ劇場……生の舞台鑑賞を通して子どもの豊かな心を育成
特定非営利活動法人 平和のための戦争メモリアルセンター
……アジア・太平洋戦争を次世代へと伝承する平和教育活動
水辺とまちの入口研究所
……水辺のまちあるきや勉強会、市民ワークショップを開催。堀川検定を企画・運営
一般社団法人 音楽のちから……病気や障がいと闘っている子どもたちに音楽を届ける活動
Teatro S'otopera（劇団そとぺら）…野外deオペラ～第3回野外クラシック音楽フェスティバル～
劇団シンデレラ……ミュージカルで子どもたちにSDGsを伝える
名古屋学生演劇祭実行委員会…名古屋学生演劇祭および関連企画の実施
サクラデファミリア……アートを「家族」という視点から見る、家族で楽しむ展覧会
特定非営利活動法人 福祉発信基地友の家…さまざまな障がいを持つ人のアート制作・展示活動
「尾北郷土誌」の会……尾北地域の歴史・地理・文化・風俗等の調査と研究

高校生の文化および体育活動への援助

愛知県高等学校文化連盟……歌舞伎鑑賞会
愛知県高等学校文化連盟……狂言鑑賞教室
日本福祉大学付属高等学校……吹奏楽部
大同大学大同高等学校……演劇部
愛知県立半田工科高等学校……弓道部
愛知県立豊橋東高等学校……卓球部
愛知県立幸田高等学校……卓球部

Ayuchi

あゆち第102号●2025年10月

発行：公益財団法人 あいちFG教育文化財団
〒460-8678　名古屋市中区栄三丁目14番12号 あいち銀行本店内
☎(052) 262-9601
https://stg.aichi-fg.co.jp/sustainability/attempt/social/foundation/